

Title	書評: 大石裕著 『ジャーナリズムとメディア言説』 勁草書房、2005年
Sub Title	
Author	浜, 日出夫(Hama, Hideo)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2006
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.11 (2006. ),p.114- 118
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20060000-0114">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20060000-0114</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

---

書評：大石 裕著

『ジャーナリズムとメディア言説』勁草書房、2005 年

浜 日出夫

---

本書は著者が満を持して取り組んだジャーナリズム論である。あとがきによれば、著者のジャーナリズムに対する関心は学部生のころにさかのぼる。だが、著者はすぐにジャーナリズム研究に取り組むのではなく、いったんマス・コミュニケーション研究へと迂回する。それは、「数多く出版されているいわゆるジャーナリズム批判の文献の多くが、研究書としては刺激的でなく、平板に思えたからであり、それゆえに、マス・コミュニケーション、特に政治コミュニケーションの視点を自分なりにある程度確立してからジャーナリズム研究に取り組む必要性をつねに感じていたからである」(266 頁)。著者のマス・コミュニケーション研究の成果は前著『政治コミュニケーション』(勁草書房、1998 年)に結実する。そして、本書は、著者がこの成果をふまえていよいよジャーナリズム研究に取り組み、「長年の宿題を仕上げた」(266 頁)ものである。

評者は本書のジャーナリズム論としての意義を専門的に批評する能力も資格ももたない。それはしかるべき場所でしかるべき評者によってなされるはずである。評者はここでは本書をふたつの観点、すなわち本書が社会学理論にとってもつ意義という観点と、集合的記憶研究にとってもつ意義という観点から論じることにはしたい。

著者がジャーナリズムを捉えるさいの基本的な視点は「社会の中のジャーナリズム」(60 頁)という言葉のうちに要約して示されている。その背景には、戦後日本のジャーナリズム論とマス・コミュニケーション論に関する著者の次のような認識がある。「日本社会においてジャーナリズム論は、ジャーナリズムの組織や個々のジャーナリストが抱く思想やイデオロギーに着目しつつ、ジャーナリズムの現状を批判することで、おもに規範的観点からジャーナリズム論を展開してきた。ところが日本の経験主義的マス・コミュニケーション論は、受け手に対するマス・メディア効果の問題に関心を集中させてきた」(47 頁)。ジャーナリズム論がコミュニケーションやマス・コミュニケーションの全体からジャーナリズムだけを取り出したうえで規範的観点に立って批判を展開する一方、受け手研究のマス・コミュニケーション論では送り手であるジャーナリズムに関する研究が手薄になっている、これこそ著者がジャーナリズム批判の文献を「平板」であると感じた理由であった。本書は、このような規範的ジャーナリズム論と経験的マス・コミュニケーション論の分離という状況を乗り越え、ジャーナリズムを社会の中に位置づけ、「マス・コミュニケーション論としてジャーナリズム論を再構成する」(66 頁)というきわめて野心的な課題に取り組んだものである。著者のマス・コミュニケー

ション研究への迂回はこのために必要とされたものであった。

「社会の中のジャーナリズム」という本書の視点の背景にはジャーナリズム論とマス・コミュニケーション論の分裂という戦後日本の学問状況があるだけではない。それは日本社会の変容によって要請されたものでもある。著者はこの変容を「文化の政治化」（5頁）と呼ぶ。それは「権力や支配といったまさに政治的な領域や現象の中で、文化の重要性が増大し、それに対する注目が高まってきたこと」（5頁）を指している。これは逆に見れば、政治という領域が、従来考えられてきた政治家、官僚、圧力団体といった政治エリートの活動や、投票行動のような制度化された政治的行為には限定されなくなり、文化という領域に拡大していったことを意味している。そして、この「政治の拡大」（6頁）という現象の中心に位置するのがマス・メディアやジャーナリズムである。従来のジャーナリズム論においても「第4の権力」としてのマス・メディアに対する批判は行なわれてきたが、「文化の政治化」が進行するなかで注目されるようになったのはマス・メディアやジャーナリズムが有する「不可視の権力」（11頁）という側面である。それは、たとえば選挙報道が投票行動に影響を与えるというように目に見える権力行使ではなく、社会の支配的価値観にしたがってニュース・バリューが判断され、それにしたがって生産されたニュースがまた社会の支配的価値観を再生産するというニュースの生産過程そのものの中に埋め込まれている目に見えない権力行使である（90頁以下）。そして、そのようなジャーナリズムのもつ「不可視の権力」を問題にすることは、必然的に社会の中にジャーナリズムを位置づけ、社会全体の価値観とジャーナリズムの関係を問うことを要請するのである。

このように学問状況と社会変容の両者にうながされて「社会の中のジャーナリズム」を捉えるために、著者はマス・コミュニケーション研究の理論と方法の刷新を図る。

まずマス・コミュニケーション研究の理論的刷新のために、著者は戦後のマス・コミュニケーション研究に大きな影響を与えてきたアジェンダ設定モデルの理論的展開を再検討する（第四章）。著者によれば、アジェンダ設定モデルは、マス・メディアやジャーナリズムによって設定されたアジェンダが一方向的に受け手の認知に影響を与えると捉えている点で限界を有する。著者は、アジェンダ設定研究から生まれたメディア・フレーム研究を、メディア・フレームとオーディエンス・フレームの相互的な影響を分析の対象とすることによって、「社会の中のジャーナリズム」を捉えるうえで、大きな視座転換を果たしたものとして評価する。そして著者は、象徴的現実（メディア・フレーム）と主観的現実（オーディエンス・フレーム）に、客観的現実を加えた、三つの現実が相互に影響を与えあうなかで現実が社会的に構築されるとする「メディアと『現実』の社会的構築」モデルに、さらに独自に時間軸を導入した『『現実』の社会的構築や構成に関する時系列的モデル」（125頁）を提案している。

また、この理論モデルの刷新に対応して、著者はマス・コミュニケーション研究の方法の刷新も企てる（第五章）。従来のマス・コミュニケーション研究における主要な方法である内容分析は、たとえば選挙報道の内容分析を行ない、これと有権者の投票行動の関係を研究する場

合に典型的に見られるように、メディアによる受け手に対する一方向的な影響を想定するアジェンダ設定モデルと親和的な方法であった。著者は、「社会の中のジャーナリズム」、とくにジャーナリズムの不可視の権力を捉えるために、メッセージの内容にとどまらず、その背景にある社会的・歴史的な脈まで分析の射程に含める言説分析および物語分析という方法を検討している。

戦後の日本では、日本新聞学会（現日本マス・コミュニケーション学会）が早くから日本社会学会と独立した組織として成立した事情もあって、マス・コミュニケーション論が社会学理論とは独自に発展を遂げてきたように思われる。ジャーナリズム論とマス・コミュニケーション論の分離があるだけではなく、あるいはそれ以上にマス・コミュニケーション論と社会学理論の分離は大きい。社会の全体からジャーナリズムが切り離されて論じられてきただけではない。これはジャーナリズムを切り離して社会が論じられてきたということも意味している。「社会の中のジャーナリズム」という著者の視点は、たんにジャーナリズムを社会の中に位置づけることによってジャーナリズム論の刷新を求めているだけではなく、ジャーナリズムを組み込んで社会を論じることの必要性を示すことによって社会学理論の刷新をも同時に求めているのである。個人的には、60年代にでてきたバーガーとルックマンの「現実の社会的構成」というモデルが完成度が高かったためにかえって社会学理論の側では十分継承されないままに終わってしまったのに対して、ジャーナリズム論において独自の豊かな発展を遂げてきたことを本書で知り、不勉強を恥じるとともに、率直に驚きも感じた。これは、「社会の中のジャーナリズム」という視点がジャーナリズム論にとって重要な意義を有するだけではなく、社会学理論にとっても大きな意義をもつことを示している一例にすぎないであろう。

また著者の『『現実』の社会的構築や構成に関する時系列的モデル』は時間軸を組み込んでいることによって集合的記憶研究にとっても重要な意義をもつものとなっている。このモデルでは、客観的現実（社会的出来事）・象徴的現実（ニュース）・主観的現実（社会レベルでの認知・態度・行動）の三つの現実が相互に影響しあいながら時間の経過とともに動的に変化していくことが捉えられている。そして、著者はこのプロセスの中に集合的記憶という要素を組み込む（128頁以下）。すなわち、ある社会的出来事がジャーナリズムによってニュースとして報道されることによって、それが人々の集合的記憶として沈殿すると、この集合的記憶を利用してあらたな社会的出来事が作り出され、またこの集合的記憶をフレームとしてこの社会的出来事がニュースとして報道され、さらにそれが同じ集合的記憶をフレームとして人々によって受容されていく、このようなプロセスを通して集合的記憶が再生産されていくのである。そして著者は、第六章「集合的記憶とマス・メディア」と第七章「メディア・イベントの政治学」において、ホロコーストという社会的出来事と、この出来事についての、それ自体メディアを通して作られた集合的記憶にもとづいて作り出されたホロコースト・メモリアル・デイという社会的出来事を事例として、集合的記憶がメディアを通して生産・再生産されていくプロセスを具体的に分析している。

評者はここ数年広島原爆忌をフィールドとして原爆の記憶に関する調査を行なっているが、著者のホロコーストの集合的記憶に関する研究からは学ぶところ大であった。とくに第六章における記憶の場とメディアのかかわりに関する分析はたいへん刺激的であった。アルヴァックス以来、集合的記憶と空間・場所の関係は集合的記憶研究のひとつの焦点となっている。著者もまた、ホロコーストが集合的に想起される特権的な場所として、ホロコースト記念館やアウシュヴィッツ、アンネ・フランク・ハウスなどを取り上げている。著者はそれにとどまらず、さらにこれらの場所とこれらの場所についてのマス・メディアによる報道との関係を考察する。集合的記憶と場所の関係についての研究、メディアによる報道を用いた集合的記憶の研究はそれぞれ数多くあるが、両者を関連づけた研究は少ない。たしかに原爆ドームの前に立つ人のほとんどは、はじめて原爆ドームを見るわけではなく、あらかじめメディアによるさまざまな報道に触れたうえで、原爆ドームを見ているはずなのである。この両者の関係、現場に立つ経験とメディアの報道を通して作られる経験の関係が今後の集合的記憶研究の重要なテーマであることを示したことは本書の大きな意義である。またこの関係を分析するために著者によって導入されている「メディアの現場」(207頁以下)という概念もまたたいへん興味深いものである。またイギリスのホロコースト・メモリアル・デイをメディア・イベントとして分析し、それと集合的記憶の関係を考察した第七章も、広島原爆忌をメディア・イベントとして分析する可能性を示唆するものとしてたいへん興味深かった。

最後にひとつだけ感想を述べておきたい。じつは評者はアンネ・フランク・ハウスが「権力性」という言葉を用いて分析されているのを読んで一瞬ドキリとした(210頁以下)。それはたんにナチスによって捕えられ強制収容所で死んだユダヤ人の少女と「権力性」という言葉がそぐわないということではない。著者の言う「権力性」が、メディアの権力作用を通して場所が帯びるようになった「権力性」のことであるということを理解したあとでも、やはりある違和感が残った。それはたとえば「原爆の子の像の権力性」と書くことにためらいを感じてしまうことと関係しているような違和感である。「原爆の子の像」が著者の言う意味での「権力性」を帯びていることは明らかである。しかし「原爆の子の像の権力性」と書くとき、それは反射的にそのように書いている者の立ち位置(*positionality*)についての問いを呼び起こしてしまう。それは「エノラ・ゲイの権力性」と書くときと同じである。原爆の記憶はパールハーバーの記憶や南京大虐殺の記憶などが形作る戦争の記憶の磁場のうちに置かれており、原爆の子の像もアリゾナ記念館や南京大虐殺殉難同胞記念館などとともにこの磁場のうちに立っている。そして、原爆の記憶について書くという行為もまたこの磁場から自由ではない。それはこの磁場のうちで自ら権力性を身に帯びつつ書くということにほかならない。言説分析という方法自体もともとそのようなものであった。フーコーによれば、言説の外部には出られないのである。これは言説の記述が不可能であるということではない。言説を記述するということが、ある言説編成の内部で、その言説編成にパフォーマンスに介入する実践としてしか行なえないということである。ホロコーストの記憶もまたアメリカ、ドイツ、イスラエル、パレスチナ

などが形作る強い記憶の磁場のうちに置かれている。そして、われわれもまたそれから自由ではない。アンネ・フランク・ハウスの「権力性」という言葉を読んだときに一瞬ドキリとしてしまうことそのものが、われわれがメディアによって作られた集合的記憶をすでにフレームとして身に着けてしまっていることをなによりも雄弁に物語っている。著者はもちろんホロコーストの記憶が置かれているこのような磁場について十分注意を払っている。それゆえにここの磁場の中での著者の立ち位置が気になってしまうのである。アンネ・フランク・ハウスと「権力性」という言葉の結びつきにドキリとしてしまったのはこのことが気になったからであった。

[本体価格 3,885 円]

(はま ひでお 慶應義塾大学文学部)